

刊行にあたって

最近のスマートフォンのカメラ機能の高さには、目を見張るものがある。ポートレートモードはとりわけ美しい。このようなカメラをほとんどすべての人が持ち歩いているのだから、すごい時代である。私たちが学生だった20年以上前は、「写ルンです」(富士フィルム)だった。枚数に限りもあるし、現像にはお金がかかるので、いまよりもずっと慎重に写真を撮っていたと思う。世の中にデジタルカメラが初めて出てきたとき、小さな画面は見づらく、おもちゃみたいで違和感しかなかった。

初めてデジタルX線写真を見たときも、同じ気持ちだった。「フィルムのほうがよく見える」「デジタル画像は見づらい」と感じたのを覚えている。ただ、現像機や現像液を必要としないことや、撮影してすぐに見られることに未来を感じた。それがあつという間に普及して、いまとなつてはほとんどの開業医がデジタルX線を採用しているし、もっと言えば、CTを導入するのが当然となっている。もちろん画質も改善され、フィルムとの立場は完全に逆転した。

私が開業してから、すでに17年が経つ。この17年間の変化は、本当に大きかった。歯科医院の内装はデザイナーが設計し、診療機器もデジタル化が進んだ。広告は新聞やタウンページから、ホームページやポータルサイトに切り替わった。そして何よりも、インターネットの普及によって情報が溢れ、患者や労働者の権利が周知され、「働き方改革」など社会全体のかたちが変わろうとしている。歯科医師が診療だけをしていればよい時代は、終焉を迎えつつある。開業するならば、経営と教育をしなければ成り立たなくなるほど、機械の進歩は早く、設備投資には資金がかかるようになった。だが考え方を換えれば、これほどわかりやすい時代はない。「見て盗め」の時代から、「書いてあるから読め」の時代になった。欲しい情報はすぐに探せるし、SNSでは誰とでも繋がれるようになった。工夫次第でいくらかでも充実した開業ができるだろう。

私たちの仕事の対象は歯であり、人である。相手が人である以上、どんなに時代が変わっても、変わらないことはたくさんある。デジタルカメラもよいが、フィルムのアナログ写真も捨てがたい。これからの開業は、最新の知識・技術・デジタル設備で武装しつつ、アナログのよさをもって患者との対応に力を注げるようなものにしたい。本書がそのような開業の一助になれば幸甚である。

2020年2月

編集委員 荒井昌海